

1984年6月25日発行

17号



中村 哲・尚子

パキスタン

マリー言語学校にて

ウルドゥー語研修中

お元気ですか？ 5月25日に事務局の船戸主事と共にパキスタンに入りました。首都のイスラマバードで、日本大使館員と先に入国して待っていた福岡登高会の新見氏に尽力して貰って、必要な滞在手続きのためにかけずり回りました。

ベジャワールには数日滞在したのみで、すぐマリーという避暑地にあるウルドゥー語学校に入り、6月4日から授業が始まりました。

ベジャワール・ミッション病院では、院長のウジャーガー氏を初め、現地のスタッフたちが心から再会を喜んでくれました。とくに私と関係の深い leprosy unit (ライ病科) では、顔見知りの患者たちが大喜びで抱きついてきました。病院もスタッフたちも殆んど一年前と変わらず、自分はやってきたというよりも、ここに前から居てしばらく離れて帰ってきたような気がしました。

当地の人々は、みな人なつこくて底抜けに明るく、人の目をまっすぐ見ます。自分自身、単純な人間ですので非常によく気があいます。話によると、昨年来、ドクター・ナカムラがすぐにも来るという誤報が毎月とびかい、みな首を長くして待っていたとのことです。ライ病棟では、二ヶ月前に赴任したというドイツ人のナース、シスター・エッダという人が責任者になっていましたが、今まで医師不足のため管理がどうしても不十分になりがちであったので、大喜びで迎えてくれました。

私の当地での主たる任務は次の二つです。

- 1) 北西辺境州政府のライ病根絶計画に参加する形で、ベジャワール県を中心にその早期発見と持続的ケアを責任をもって行うこと。
 - 2) これも州政府と協力する形で、移動診療を駆使して、医療の谷間にあるスラム地区と山村無医地区の、総合的な健康管理を持続的に責任をもって実施すること。
- しかし、このためには、まず院内のスタッフたちや地元の関係者との強力な協力関係を築くことから始めなければなりません。複雑な政情の中で、ときに困難も予想されますが、長い時間をかけて文字通りフロンティアに基地建設することにしばらくは全力を投入する積りでおります。ことばの学習もその一つにすぎません。

やがて私の派遣も不必要になるのが目標ですが、まだまだ先のことです。やっと初めの始まりがスタートしたというところです。

「事を企てるは人なり。機を決するは天なり。」というのは古い格言ですが、私たちの業が御心にかなうものとなりますように。